

本本の図書室

== MORI NO TOSYO SHITSU ==



〒150-0044
東京都渋谷区円山町5-3 3F
インタビューー 森俊介様

今回ご紹介させていただきますのは東京渋谷にございます、「森の図書室」です。昨年の7月にオープンし、Facebook等でも話題となり多くの方が利用している図書室です。渋谷の街と少し堅いイメージの図書室、このミスマッチとも思える図書室の存在に興味を持ち訪問、オーナーでもあり、図書委員長でもある森俊介様にインタビューをさせていただきました。

開室が夕方の18時からということで夕暮れの中、活気ある若者の街、渋谷に向かいました。道玄坂に面したビルの一室にこの「森の図書室」はありました。ビルの3階、鉄の扉の横に「森」という表札らしきものとインターフォンがあり、少々怪しいなあと思いつつもインターフォンを押しますと「どうぞ、お入りください」との返事が・・・、恐る恐る扉を開けますとそこには渋谷の喧騒からは全く想像できない癒しの空間が現れました。照明のレトロ感、一枚板の長い棚で壁一面に配列されている想像を超えた数多くの本に圧倒されました。座席数は約60席。バーカウンターもあり、「お酒」を飲んだり、飲食しながら読書できる図書室でもあります。



確かに我々、社会人にもなると図書館で読書がしたいという思いに駆られても仕事帰りには時間的にも公共の図書館は閉館しており、ゆったりとした空間で読書をする機会がないと感じました。この「森の図書室」は、そういったサラリーマン、OLのニーズに合致した図書室だと納得しました。私が入って間もなくOL風の女性が次々と来室され、お酒を飲みながら思い思いに本を取り読書している姿を目にし、改めてこのような場所こそがこの喧騒の街、渋谷で求められていたことを実感しました。

私もビールを注文しようとメニューに目を通しますと、メニューにも本と繋がる小さなきっかけが作られていました。単に料理が記載されているのではなく、その料理、ドリンクが出てくる本の紹介が記載されていました。

<料理>

「東京ポトフ」： 『ランチのアッコちゃん』 / 柚木麻子

「パパの好きなキッシュ」： 『西の魔女が死んだ』 / 梨木香歩

「薫製ニシンの虚偽」： 『そして誰もいなくなった』 / アガサ・クリステイ

「トマトとモッツアレラのカプレーゼ」： 『ダンス・ダンス・ダンス』 / 村上春樹

<ドリンク>

「ウォッカトニック」： 『ノルウェイの森』 / 村上春樹

「電気ブラン」： 『夜は短し歩けよ乙女』 / 森見登美彦、『人間失格』 / 太宰治

「ホットチョコレート」： 『モモ』 / ミヒヤエル・エンデ

そしてドリンクのコースターには「森の感想文」と記載されており、表に本の題名とオーナー自らのデザイン、裏には著者名と森様の感想文が記載されており、細部まで本に繋がるきっかけ作りをされていると感じました。



森様は早稲田大学を5年かけて卒業後、リクルートに入社し広告の営業に4年間従事された後退職。その後海外に留学、日本一周などされたそうです。退職したのは決してその仕事、また会社が嫌になったのではなく、自分でやってみたいことへの挑戦のためであり、それが長年、思い描いていた自分の図書室を作ることでした。そして昨年7月に30歳でこの図書室をオープンされたそうです。

なぜ、この図書館を作られたのか尋ねますと、ただ純粹に「本」が大好きで本に囲まれた生活がしたかったこと、また「お酒」も大好き、とても明快な回答が返ってきました。コンセプトはお酒を飲みながら本も読める空間だそうです。幼少の頃にお友達の家で本と出会い、幼稚園の送り迎えのお母様の自転車の後ろでずっと読書し、いつか自分の図書館を作りたいという夢を持っていたそうです。その後も図書館、図書室はよく利用していた無類の読書好き。しかし社会人になってからは図書館が駅から遠く、また時間的に閉館していることが多いことから社会人が会社の帰りに立ち寄れるように夜遅くまで開けている図書館を作りたいと考えたそうです。



裏のコンセプトは「ぼくんち」。つまり友達の部屋に行ったような気軽な空間。従って「図書館」ではなく「図書室」とし、あえて、こじんまり感を出したかったそうです。

「友達んち」へ行って、たまたま、この本、面白そうだなあと手に取って見る。「友達んち」だから飲みながら、食べながらでもいい。決して本を読むことを強制しない空間でありたいと考えたそうです。

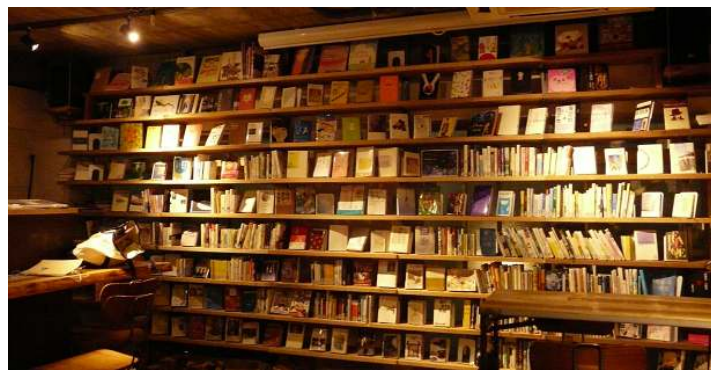
「森の図書室」は「ぼくんち」の空間でもありたいことから通常の図書館のように分類はされてなく、



本はランダムに配置されている。これは、たまたま座った場所に色々な本がランダムにあることで偶然の出会いがあり新たな分野の本とめぐり合う機会にもなると考えてだそうです。入り口の表札、インターフォンの意味も納得できました。現在、定期的に読書会のイベントも開催しているそうです。読書会ではこれをきっかけに友だちを作ってもらいたいとのこと。一人で本を読むことはもちろん面白いのですが、他の人と本について話をするのもここでもしか出来ない楽しさではないかと考えての仕掛けです。

今後の展開については、評判を聞き他府県から図書室を出してほしいとの依頼も受けますが、渋谷の雑多で多種多様な人がいる街こそ好きでもあり、ここに根付き新たな展開等をしていきたいそうです。夢でもあった自分の図書室が出来たこと、しかしこれがゴールではなかったこと、ここにたどり着いたからこそもっと楽しいことが見えてきたと感じ、今後もさらなる挑戦をしていきたいそうです。

今回、森様をインタビューさせていただき感じたのは読書離れと言われている中で、森さんもおっしゃるように無理に読ませる、強制することはかえって良い結果へと繋がらないこと。むしろ読みたいけれど、何を読めばいいのか分からない人達が結構多くいるのではないかと考えていること。これは私達ライブラリアンが日々、学生の皆様にどうすれば図書館に来ていただけるのかと悩んでいる中、一つのヒントとなるのではないかと感じました。本へと繋げていく小さなきっかけを常に考え、作ることもこれがとても大事なのではないかと感じました。



また、ニーズが何なのか、ここを分析すること、つまり現在の学生の動向を現場にいる我々こそがしっかりと把握、理解しないと小さなきっかけさえも作れないのではないかと感じました。

無類の読書家でもある森様ですが、決して「オタク」的ではない。とても好感の持てる好青年、実業家と感じました。また、森様はSNS【Social Networking Service】を駆使し寄付をはじめ、多くの利用者を獲得されています。これは単に受身ではない新しい発信の重要性もまた図書館へのヒントでもあると痛感しました。東京にお住まいの方はもちろんのこと、地方から東京にお立ち寄りの際は「森の図書館」に寄られることで、今までと少し違う角度で何かを学べる場ではないかと考えております。

本 本 本